

八代集抄

金葉春夕秋
冬夜離別
二五九

特別

イ 4

3163

104(29)

14
3163
104(29)

金葉和歌集 十卷

哥負八重云六百四十九首又連哥

袋草子云六百

平家言外連哥十九首

白河院^{シヨウヘン}讓位^{シヨウイ}ありくの末り後醍醐^{シヨウゴ}一人院宣^{シヨウケン}

と^シうけ^シめ^シわ^シる^シこれ^シを^シ撰^シぶ^シ天治元年^{テンジ}より^シうけ^シめ^シわ^シて

大治二年^{ダイシ}より^シ上^シ卷^シと^シ巻^シ終^シん^シと^シころ^シより^シある^シなる^シ部^シ

あり^シ第三^シ卷^シの^シ中^シ書^シれ^シる^シ案^シを^シと^シり^シ終^シん^シと^シころ^シ

件^シ乃^シ事^シた^シち^シく^シた^シと^シわ^シり^シ早^シに^シ撰^シ者^シ乃^シと^シころ^シ

け^シ本^シあり^シと^シ件^シ乃^シ本^シハ^シ故^シ待^シ賢^シ院^シより^シあり^シと^シころ^シ

今^シ乃^シお^シ相^シ國^シ實行^シり^シ出^シる^シこれ^シを^シ出^シ写^シと^シけ^シ本^シより^シハ



兼國誌宣^グ并^リ了^ス言^フ集拾遺集乃^ハ并^ニ求^メこれ^ヲ
入^ル拾遺^ハ柄^カりし^レく^ニ并^{キチ}置^セん^ノより^{シテ}これ^ヲ
を^ツも^セて^モ来^タる^ハ連^ス所^{ナク}乃^チし^テ考^ヘる^ガ去^リ野^ニと^モわ^ケ
去^リ雪^ツつ^マき^シく^ニ乃^チし^テ也^トこ^ノ本^ハ世^ニも披^ヒ露^ラし^テ
世^ニ間^ニは布^ク乃^チ本^ハ第^ニ二^ニ成^リ乃^チ本^ハ也^ト近^ニ代^ノ乃^チ人^ノの言^ハ等^ニも
但^{シテ}六^ニ帖^ニ乃^チ并^ニ并^ニ爲^ル所^ニ相^サ模^ミ等^ニこれ^ヲ入^ル事^{ナク}乃^チ故^ニ將^{シテ}作^ラす^ル
うちあ^ハびさ^シ乃^チし^テ也^ト卷^ハ終^ル乃^チ本^ハ造^ル紙^トと^モい^フ。自^ラ亦^モ
之^ヲく^ニし^テ時^ヲり基^ニ倭^ニとい^フもの何^レなり和^ノ漢^ノをみ^よ
ふ^レに撰^シ者^トとす^ルも倭^ノあり我^レとし^テどもこれ^ヲをけ^レ
た^ラず^ニ乃^チ不^レ読^ムの失^トと^モい^フ。然^レも^モい^フに^モ後^ニ果^シ紀^ス

今読第七びさの、草書と云倭札乃き今金葉集と云ひて
なり、いかりなるふと、めは、其くも、まゝとを、かすの、と
し、言ふ、は、り、是、雅、は、師、と、く、入、多、ひ、なる、を、貫、之、し、め、て、は、
し、と、い、ひ、あ、り、二、代、集、り、それ、ま、て、何、ぞ、わ、か、り、か、り、是、雅
は、師、も、け、あ、る、は、き、あ、り、と、ある、作、事、に、な、れ、は、古、き
上、は、さ、い、つ、る、ち、り、わ、か、り、又、い、と、も、あ、り、あ、り、め、す、人
の、う、い、つ、り、わ、か、り、と、く、あ、り、の、人、を、の、か、り、い、ま、く
は、き、乃、い、ひ、な、り、な、れ、は、これ、は、か、り、も、あ、り、い、ま、と、
作、事、な、れ、は、又、は、か、り、を、し、て、原、重、之、と、い、は、れ
し、と、さ、う、と、い、わ、さ、せ、あ、ひ、なる、は、か、れ、く、母、し、い、は、る

[illegible]

ありきされと倭船よりハ根をひくく倭船に倭船
そいひくぬるまうく一くさすよめる力も及ぬ也
八重と倭船の長法性も入道乃ともふ外花乃を主
がともんぬるや残が垣わいころあふたわとよみて名
をくす時人感之はくすまぬわい何か

金葉葉乃風林

鴨子明母の所々金葉集ハ又能くさうくんと
 源々々々々々々々々々

八雲と拾遺金葉の比わめらざるをいふか
平懐ある跡あれどぬげくよきうといふなり

乃佛房口傳云金葉詞花をいふにみえりうりてい
しやうきとていふにうきとていふにうきとていふに
かりりいん
金葉集乃名目ハ金ハ廢ル乃詞。葉ハ言葉也。諸家乃
金言をいふはわいふとていふに又佛在せり金葉乃花
いふにばや乃よきとていふに字をいふにひいけ物撰乃
集乃名とせしきなり



春哥或本春又或本
春部こあき
堀河院七十八代清輝
善仁白河院第二子
所母中宮賢子所生云
女應徳三年十二月十
九日即位は百首歌ハ
匡房とて今鏡に
うちあひききききき
うちあひききききき
はく押さくくのき
東風解お月令
春ささく梢よ
かしきハ速のき

金葉和歌集卷第一
春哥
堀河院乃清時百首の哥なり。時
きききききききき
正覆下隆經子
修理大夫顯季 三位
六条家祖
うちあひききききき
いふにいふにいふに
春官大夫公實
大納言實季
春ささくいふにいふに
かしきハ速のき

心明也

うづとけゆき
東乃昭ゆきとよみ
て天の戸かりやと
よめり戸あけよ
はらけやけり春は
心明しそきく四
首皆さう一首は
中乃まきのまに
前安官同侍作者部類
河内同人にこ永縁妹
後南親王家、女房とこ
す乃くもむのれ
心明し東乃解事心
うづとけ

荅原野仲朝書
二信

卷之二

うゝと何けゆうのかすめそ
あまの戸よりやまゝいん

金吾祝王白河皇女

金匱要略王白河皇女

皇后宮肥後肥後宮定盛

一

流るやわさ谷川乃とけけと
あふあやさるるる門らん

百首乃舟の中も秘春乃心を人ふ

ちりてよめる
前所當内侍 大義天順
永相安

前次堂内侍 大英天順
永相安

大英夫

得相

まろくをばすの風れいふれん
けさうしーもこわらうらん

けさうしんりやうらん

うゝと春のそと

新原大和へあはれ
 以上はあつた月ら
 せうやうへ

初善の心と後。太宰大貳長實

孔子

一法一と春乃ちる一と一の
 あゝ乃原のかすみあるとあり

正月付、雪乃少、始久れ。

片のうへ
修理丈取手

わが世の勢は
さへ

何れ年乃ちめは隆吉に
とて雪とて子にふりなれ

春宮大史公案

新戸市へ春の
そよ風

新戸あけく春乃梢に雪をねん
初とるともやりつらん

くやとて雪うち解
年明くも雪のまは
ぬくれとていふまじ
さうけいといふまじ
郊まあるかりと
やまありとて
うひとめまうと
雪れといふまじ
ね雪に木枯すま
ふ明くおとるま
月夜あまふま
重信宮 合子内親王皇子
女鳥羽院唯母女御院
春あにふちむれと

くやとて雪うち解
くやとて雪うち解
あつち雪をまへ
よめ
うひとめまうと
雪れといふまじ
ね雪に木枯すま
ふ明くおとるま
月夜あまふま
重信宮 合子内親王皇子
女鳥羽院唯母女御院
春あにふちむれと

梅乃花ふあけり
たふあけりあけり
しくきく
もさあけり
よさういふまじ
あけりいふまじ
たふあけり
くやとて雪うち解

梅乃花ふあけり
たふあけりあけり
しくきく
もさあけり
よさういふまじ
あけりいふまじ
たふあけり
くやとて雪うち解

風吹くも神
かきくも

朱雀院 拾遺公累代
院武馬 累代院三系
南朱雀西野 累代
西坊 東

くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

おぬ社とくわひぬるの形

朱雀院より人こまりて 園庭極
いづれと強る 大納言經信 病をなす

くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

道雅の家 哥合 梅をよめる

后原兼房 弟 梅をよめる

くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

梅をよめる 源忠孝 神祇伯子仲子
官内大補

おちあきくちり
おちあきくちり

大中長公長 散位公定子
三位と定安父と

春日野乃子日れね
神さくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり
おちあきくちり

子日のふを強る 大中長公長 弟長

春日野乃子日れね
神さくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

百首 哥乃中乃子日乃をよめる
大納言經信 大納言經信

くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく
くさくさくさくさく

ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく
ひくさくさくさく

あをゆすを乃もろゆは
打通ふ
 宇治家太政大臣兼極乃家持は幸
 日徳世流る院清製
 もろがとく豆ゆ。いはいえいもあ
 花乃おひりうるよわわく
 まの根といふるをよる
 春宮大史公実
 ちやとち乃る根のしつ
 こわまといふいふわわ
 松岡根といふるをよる

春官大史公羊

松岡梯乃

左無功特實能

周大良作者部類云有仁輔仁說字号不周

輔仁君子學花園

まはなふなりは地れ
 てま風の方ねえと
 何れとそ國のあ
 まはけり風ふき
 まねとふすまは
 こゝまのふま
 ね乃常盤な枝さ
 かつとちふふふ
 ちつとふふふ

こ乃をもいひ。糸息さうな
按さかきと松乃さうな

山花子サタ
子コ

葛麻子降火

左京大夫經忠

三徑

よきうへにまゐり
ひつて山をたふ
そこのまゝの

あさうこしと鳥の風乃さびたれい
花乃さうりうきりうわふ

ようやくいふことば
ききなりをきき
けとえちてきき
ききなり
ききなり
ききなり

わき山うつろ花
花なりうつろ花
花のききうつろ
おのけきうつろ
ききなり

ようやくいふことば
ききなりをきき
けとえちてきき
ききなり
ききなり

ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき

太宰大貳長實

わき山うつろ花
花なりうつろ花
花のききうつろ
おのけきうつろ
ききなり

源氏後朝臣
推定
忠通公号
法性寺

ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき

ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき

源氏後朝臣

ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき

ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき
ききなりをきき

大中臣長朝臣

中ゆく暮をこし
車拾遺のちあけ
るもく山をこし
やまのめりいふ
野のまにほふれ
すもなほくぬ
上りけり但し
ちりけりも
風吹ぬま
こころの
也
りて
やま
宋祇云

う治前太政大臣の身合は様を
よめ
ちりけりも
風よりけり
やま
やま
遠見山
大花
と
人

岸をれい
や
花
と
と
乃
の
や
い
ま
あ
花

何れり
う
乃
見
橋
あ
め
ま
つ
人

せわさるんさる
 松骨のちや
 けさこれいよなり
 ぬきうちわき
 ありさるあさる
 中宮乃法方篤内親
 王後三條院皇女
 齋院寛治六年四
 月入内侍
 中宮入立
 こすさるいふさる
 んさるいふさる
 一さるいふさる
 あるさるいふさる

花は庭といふさる
 乃東持實^{公實子}
 号徳大寺大権
 けさこれいよなり
 庭さる花乃さる
 堀河院清時中宮乃法方
 風お花^{シカミテ カラハニ}さる
 中宮
 こすさるいふさる
 かるさる風乃さる
 花乃さるいふさる

ちき持伊通
 大納言家通子号
 九条大政大臣又号大
 宮太政大臣
 うやまういふさる
 我あさるいふさる
 まさるいふさる
 心なり風さる
 心なり風さる
 心なり

長實^{中納言仲女}
 太政大臣
 ちき持伊通
 うやまういふさる
 花さるいふさる
 水上花といふさる
 大納言経信
 心なり風さる

わくいふいふとわるきとるき

菟原成通朝臣わい

あ乃ちまにちりけむ花をうけ
うめく風をうめくうめく

落花衣りちるといふことと

よめ
菟原永實はなぞう

ちりけむけき雪れこちり
花り神乃ぬれぬちり

堀河院時花乃ちりいふこと
あつめいおめいある物乃いふ

あ乃ちまにちりけむ
月之雪落衣と
心明し梅を列り
折梅花而柳頭二
ちりけむけき雪れこちり

山乃けき雪れせきく中宮乃
花乃ふもせきりけるを
花乃いふよめいおめい
いふもはけき中宮乃

さくさくやめくさくさく
よのやめくさくさく
花乃庭よりちりけむ
いふよめい
菟原院安養誰れ
花乃いふよめい
ちりけむいふいふ

さくさくやめくさく
山乃けき雪れせきく
花乃ふもせきりけるを
花乃いふよめい
いふもはけき
さくさくやめく
よのやめく
花乃庭より
いふよめい
菟原院安養
花乃いふよめい
ちりけむいふいふ

ちんちんはひふあつて
 昼ちりうーと花
 まれへとあれたる
 ちんとていやうな
 こころをさめよう
 うーと、ふふあつて
 さうらう山田を
 赤くしてあつて
 をうへにうへに
 とあつてあつて

隆源法師 山阿同和
多要書通

子使也通家子

春物（すうり）ふ山田（ふやま）ふとて
よみ（よみ）ふとて
ふ階（ふかい）短成（たんじやう）胡（こ）常（じやう）徳（とく）

之階經成胡古

さうして山田を流るる上の方
かきくや花をみる人
花を誘ひつゝ古き時伊通
あゝ中とみわたりふんぞり
楊子

てある小びきり
又乃字二ありあり
但本さく、但本を可
きを知らん人
何れも此れ月と
をさく、いさなり
ん人なりとせしや

一品章子内親王後一條
院長女永承元年七月
十月中宮より一子生
ず年十一歳に於て
世よりなり

後於泉院時月乃ありて

女房所仕中ノ南殿より下りて参上

も近のまゝ

ふりそふに乃たふちりて面白

町奉行に
是を
知
人

よえせやと
かきぞうとて中宮

乃唐書下野河人上女

はうふわれはまわりふりて

ちく何のむねとまれと信せ

こればかりではいかぬ

春乃此れ月乃え
心明也下六春の衆
月を中宮よりとて
中宮乃此威光なり
て此に主上乃此
あつり南殿乃此
己もさういふと
ぬきとや

ちりしてぬき乃
残光のりなりて
あつりとさす
おしにちりすとい
いりせりいれ
いと

いつとあらせことあらたれは
りうまうりる下野
太皇太后御
乃此遠徳也
春乃此れ月乃ひかりのあらせ
中乃此れさきくあら
カスニ
乃此院をさきく
新院乃此れさきく
乃此院をさきく
つとてさきく
乃此院をさきく
中乃此れさきく
乃此院をさきく
ちりしてぬき乃あつりとさす
いとひー風うりる
あつりと人い首首より
よき殿とよめ

やまのいの乃
ふい

何つすら乃わや
八世おさかやの
万葉三可保
ア仍威いり
りりる
さうく
てい
あふ
日本紀

やまのいの乃
おさか
百首乃
推僧正永縁
大皇太后御
無福也

何つすら乃わや
もをさきく
春の
あふ
いく

苗代をよめる はち國基 後醍醐天皇
 晴乃わる野さし乃小田をうらみ
 こねまきくわちあけしつてくんゆ
 後冷泉院時弘徽殿幸乃哥合
 こ苗代と清く 菟原隆資
 やまきと乃くとしれ小田乃あき
 岩乃れあせせうぬ目うあき
 家乃山吹や人にあきさき
 けういなるはわくよわくをよ
 よめる 中納言雅定

中納言雅定

わらやとくしうふらん人小思るえり
おとしかやけいしうやまふさ乃を
あき多敷冬 持政房大信
はかり何れもちふふおき山吹を
いへまわりうわく乃にふ
おろこ心を 太宰大貳吉実
春うす神多ひ川より新しく
うけうひなたりやまふさの花
後北条院所時身今山吹とよめ
れ 前太宰大貳吉房

やまきはなはる風
心ゆく我々の八重
山吹に重なる
のうらみもあはれ
たゞはなれど
いづれはすれぬ
うらみはくはる
院乃かき
由河院より
面乃侍をきく
中よりねね
常照橋八重

やまきはなはる風
八重あはれ
晩見マミ蹴陽キョウといふこと
橋取は大臣家
いづれはすれぬ
やまきはなはる
院乃かき
とよめる
大まき侍
いづれはすれぬ
中よりねね
常照橋八重

こゝろはなはる
ひらき乃のゆわ
はなはる
を侍をきく
武井野より
けはなはる
あはれ
いづれはすれぬ
うらみはくはる
院乃かき
由河院より
面乃侍をきく
中よりねね
常照橋八重

なむとよめる
ひらき乃のゆわ
はなはる
を侍をきく
武井野より
けはなはる
あはれ
いづれはすれぬ
うらみはくはる
院乃かき
由河院より
面乃侍をきく
中よりねね
常照橋八重

まへ風乃ききし
原のわねなるうしろ
ききえききき
池のわねなるうしろ
池の漬せる松乃
遠枝はわねなる
まへ風のわねなる
まへ

恒なる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

あやのわねなる松乃わねなる
二条園自家より池のわねなる
るまよめる大納言経信
池のわねなる松乃わねなる
あやのわねなる松乃わねなる
百首乃舞の中より松乃わねなる
ゆる
修理大夫源季
恒なる松乃わねなる松乃わねなる
かせ乃わねなる松乃わねなる
あやのわねなる松乃わねなる

わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

若恒乃わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

神祇伯頭仲

内大臣家越後

若恒乃わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

若恒乃わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
わねなる松乃わねなる
まへ

[illegible]

おのゝちふふ乃れり那
接頭大名家より人々に有る
乃心をよめせたり

かく春や月乃のま
 ち月乃をこひ恋乃
 おはくより長行
 年ぞ殺齋より
 節事よりしを
 建八雲の系乃月乃
 形野とよまはつ
 るはつなりゆき
 きのまよきこめ
 きのまよきこめ
 きのまよきこめ

かく春の月乃いつくしき
 志しき事ありて
又無きもの眼より
 重なるてはくも年二月晦日乃日
 人乃もとよめとほきくはれ
 いかうりも
 荻原石補頭臣
 おのひやれめりりしき

春はくきくもま
年ふめりけり

しらわくくくわくく

こりすふこり

いせくきくく死別りあけきをせひやれとく或本はけくあ
り後れの新のりきくくく後れのかく春れくく車輪り
りり多きりけりきくくくくくく

金葉和歌集巻第二

夏哥

お月乃はくくく乃日衣くのく

よめ

源師賢朝臣
モカタ
後深通子
大守

おきこのきくくくくくこれねなるも

ひくくくくくくくくくく

二条園白家ゆく人く結乃心

よめせけりくくく

右京園房
後深通子
五位

お山乃何をあきくくく

二条園白 教通云
許堂園白是号大二条
お山乃何をあきくく
あきく風情あき

とうひん

應徳元年 自河尻
所在位乃年号也

結露 三つちあつて

とあつていふ

心明らる

玉柏も庭もいふ

玉柏の柏をわめて云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

ひんたふたふと云

とひんたふたふと云

應徳元年四月三條内裏より庭

樹結露と云ふこと

院御製 自河尻也

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

と云ふこと

卯むりまふし
 雪と^う花のふり

とて雷とかりねと
けりおろきなりけり
毎あふ美事ある
りてと

今やまゆくすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

今やまゆくすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

多相殿乃并合り郭公とよめ
修羅全歌集

今やまゆくすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

萩原節信
は内権吉
袋巻書

今やまゆくすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

かゝるすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

かゝるすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

かゝるすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

源雅光
は内権吉
袋巻書

かゝるすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

橘成元
は内権吉
袋巻書

かゝるすも
心ゆく拾遺集の
あらやまゆく郭公曉
けりあふゆき

これよやまねわひよあつち
 中納言 實効
 いまやまねわひよあつち 郭云
 まつち ちよちよあつち 郭云
 郭云 ちよちよあつち 郭云
 中納言 成
 まつち ちよちよあつち 郭云
 郭云 ちよちよあつち 郭云
 院 院

かゝる事すまひにあらざるに思ふる
 故に死なば人いふらん
 大御子忠家子信房又
 信忠乃家兄哥合に郭公とよ
 める
 後、二条國白家筑お
 まの人乃やと云ふてはとてす
 まりやまゝをなさくす。なり
 中納言、女御 小桑女御
 おとすはあかのみへ、をとりて
 まゝとていへけあのう
 郭公を懐く
 前母院、小桑

山崎一平
 郭公の御子
 一平の御子
 一平の御子
 一平の御子

ことさすすれはあふらひに
 こころはうらやまなり
 宇治、お太政大臣家乃所合ふ所
 とより
 康賢王母 王母の御母
 山ちうくうく舟かきさ
 あくわうこうごまわちかれ
 匡房、心算帳よりく下アたるる

康賓王母

五ノ部

中原言真

郭公よちる

荻原成通卿

皇店文式部

郭公云乃一乃二乃三乃四乃五乃六乃七乃八乃九乃十乃

きし何れに
人におきかせ
母出さすも
今一巻を
さすもせぬ
れと
かゝるす
あやうい
さうい
も何れと
あつね
うい
うい

さうのうたは

郭公やのこころ

かのうらあやうと

いんとうよりと

く月おとよ

よる

わきこはゆはの

脇海さきより

けくゆれうえ

よとつて

ゆり郭さき

白雲のさき

晴乃もは月信

あやうと

郭公のうたは

晴乃郭公のうた

源定信 中務信家子
刑部大輔

わきこはゆはの

けくゆれうえ

あやうと

よとつて

ゆり郭さき

白雲のさき

晴乃もは月信

大納言經信

わきこはゆはの

けくゆれうえ

あやうと

よとつて

ゆり郭さき

白雲のさき

晴乃もは月信

源定信

わきこはゆはの

都芳門院ミナトノカミ 堀子ミナトノカミ 白河院の
皇女ミナトノカミ 院ミナトノカミ 堀河院ミナトノカミ 准母
寛治七年正月十九日
院号ミナトノカミ 付根合ミナトノカミ 寛治
年中ミナトノカミ 也ミナトノカミ

何やめきひくく
安積沼奥列ミナトノカミ 之ミナトノカミ 傳ミナトノカミ
いひけりてくも根の
浅希沼の海き名ミナトノカミ
あまのいづれせんとい
お江あやりのあやめ
お江に越おこす
高とい玉を琢ミナトノカミ くる言
殿乃るく玉にこふ
いづれてく

三十九ミナトノカミ ころわあやめりりり
都芳門院根合ミナトノカミ のあやめをよめる
敦原孝善ミナトノカミ

何やめきひくく
いづれあまのりねりりかいらん
永曆二年ミナトノカミ 丙寅ミナトノカミ 年合ミナトノカミ のあやめを
春宮太史ミナトノカミ の實

お江あやりのあやめりり
みりけるやとれはもとえゆるい
みやけりるいづれれといふ月

何やめきひくく
うきハ沼をりり
てくもぬい沼をり

何やめきひくく
あまのあまのりいといふん

身釋書五ミナトノカミ の永縁九
案ミナトノカミ 父あまのい母推ミナトノカミ 乃ミナトノカミ
寺乃ミナトノカミ 慈母維摩ミナトノカミ 舍ミナトノカミ 九傳ミナトノカミ 乃ミナトノカミ
又せえけりて汝其ミナトノカミ けりりやといふり
あまのあまのりいといふん
お江あやりのあやめりり
お江に越おこす
高とい玉を琢ミナトノカミ くる言
殿乃るく玉にこふ
いづれてく

百首中ミナトノカミ の何やめをよめる
まゝ大丈ミナトノカミ の實

鶴乃心よめり 友原歌經朝臣
さゝしふくくみ鶴乃心よめり
うろ乃心よめり やあらん
橘政大^{イキ}臣の家よりくみ鶴の心を
よめり
源雅光
よめり
とせし戸をあらはれぬ乃心屋を
實乃心乃家の奇合なま風の心
よめり
修理大夫が幸
ありふりするのこころしくむす

おもしろいあつと鹿やあくらん
 水月映る涼とつることをよめる
 源信光卿
 月かげをとりさるゝに玉さへ
 すくありぬ日くゝのこゑ
 ことをなほよめる
 源仲成
 ささるゝやぐら新たうね
 少ともしや鹿へん
 神祇伯成仲

心明く
ちうくね端ひくす
鹿しゝすもねさ
心明くお波を岸に
あはれ 和朝をさる
とまへ三棒詩絶句の
強三五棒六棒七棒
つねあきと和朝六
朗詠集をさるめい
棒と月い棒さる
いつやや午花棒の
園中もさるのさ
ちうくねさ
やとこもさる棒
棒のまゝなく

ちうくねもさるすうふさのさ
いくよわいあきとをさる人
家乃并合は五棒をさる
中納言俊忠
いつやや午花さるさるれあきと
風乃はさるさるさるさる
百首并乃中は五棒をさる
春官大夫公實
やとこもさるさるさるさる
一まのすさと風ささる

かみりゆき
二条園白家 お通
さる
この里もさるさる
夕立せし里よりさ
まゝと睦のちの野
家乃さるさる
よめさるさる

二条園白家さるさる野さる
さるさるさる
源俊朝臣
さる
中納言雅定
おわ川つねさるさるさる
かあさるさるさるさる
さるさるさる

おうけううすめ
二山八代大おん
明やうけううすめ
おわれうすめ
おわれうすめ

今月乃て見
炎勢乃てふ
ふすあうす
ふすあうす
ふすあうす

おうけううすめ
おわれうすめ
おわれうすめ
おわれうすめ

八月廿日
八月廿日
八月廿日
八月廿日

源親序

源親序

源親序

今月乃て見
炎勢乃てふ
ふすあうす
ふすあうす
ふすあうす

源親序

源親序

源親序
源親序
源親序
源親序
源親序

源親序
源親序
源親序
源親序
源親序

金葉和歌集卷第三

秋哥

百首哥乃中よ秋立ちしをよめ

春宮大夫公實

ととににゆくゆふれ乃ねせられと

秋の月とすすくわたりれ

野草常露とつることをよめ

大宰大弼公実

ちんどもおほく乃大野乃く露を

よまふ今より秋乃をいりせ

ととににゆくゆふれ乃ねせられと
常盤不酌乃心なり
よれよりゆふれ乃
風なりと秋の月
夕暮ハあひうさ
一入すくきさき
高き草もよ化乃大野の
化大野大野をいり
乃葛の露をよめ
おほくより

あさるふとやわらうひ
あき秋風よをらうひ
ゆき雪のつらさ
と本奇なりし秋風
きくもあはれひき
をるふの春秋のふか
天喜五年三月廿日蒙
官寛子乃哥合たり
春れふたに秋のふか
清製もるをうく
交り國府のふか
りか蒙る秋風世に
より代はるる
七つあり合のふか

待草花といふことよ
皇族宮内省
あさるふとやわらうひ
秋のふか
後次皇院時をるふのふか
七つあり合のふか
より代はるる
ゆき雪のつらさ
七つあり合のふか
より代はるる
七つあり合のふか

星舎りしやのふか
つる代はるる
むとふか
乃春日をるふ
まてれはるる
七つあり合のふか
きりねに素門のふか
はるる
より代はるる
あき秋風よをらうひ
ゆき雪のつらさ
と本奇なりし秋風
きくもあはれひき
をるふの春秋のふか
天喜五年三月廿日蒙
官寛子乃哥合たり
春れふたに秋のふか
清製もるをうく
交り國府のふか
りか蒙る秋風世に
より代はるる
七つあり合のふか

いとあきく
七月七日父乃服中
より代はるる
あき秋風よをらうひ
ゆき雪のつらさ
と本奇なりし秋風
きくもあはれひき
をるふの春秋のふか
天喜五年三月廿日蒙
官寛子乃哥合たり
春れふたに秋のふか
清製もるをうく
交り國府のふか
りか蒙る秋風世に
より代はるる
七つあり合のふか

かゝる乃舟に乗りて
中納言國信
七タノカサニ
ありぬるは
七タノ船に
内大臣
おもしろく
あるは
七タノ
七タノありぬるは

内大臣

皇名文，
大吏師時。

金三二

花乃かゝるも花ゆけり
 肉大匠家越後有仁書
 何事もほかにさる毎うあなけふ
 のちわづらひもさる
 源後朝臣
 かゝるもあそびに
 何れねあふ
 草花ツク新ツクとつ
 源雅兼朝臣中納言
 大匠子
 花乃かゝるも花ゆけり

源後光朝臣

源雅興
中興
古
古
古

[illegible]

大江公資朝臣

蘇軾忠隆

風つけを枝やとてねあのみち
のり秋の月夜に

月やけふも花を
心明に咲かす
あ

草まゝくつぱらひねう
 只一人ぬやわうき様
 ぬり花より月ふ古
 乃るうきとふひやう
 ようきとふひやう
 へたとすも人あは様
 もせめりてむいへ

後深泉院所時殿上乃再合二月
の心とよめる 大納言強信
月かけ乃すみわさるおてのつ
中ふきとくまよひ乃あしよ

月梅有友といふやよめ

江橋忠令

夢よりくくこれ旅路よりさへ
 月よりわくをありあり
 閑見月ツラといふことなやめ

駱仲女

雪のほつらね
おきく

すのあゝやえと
月ふあすのあ
がもあゝを拂
やん中の塵の
けつうきし居
すや
月をさくちやあ
月とて月をさ
はくれいふ雪の
はくれいふ雪の
あきうちやあ

雪のほつらね
おきく

九月十日
すのあゝやえと
雪の塵のあ
月をさくちやあ
月とて月をさ
はくれいふ雪の
はくれいふ雪の
あきうちやあ

まゝいふやえと
らすうれん
あきうちやあ
月とて月をさ
天の月をさ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ

承暦二年
春官大吏公実
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ
あきうちやあ

花林院 一より永縁
僧正乃切の号と

いふれに結いあ
やう

三葉やまのり

春日明神も月

とていふも

大皇太后宮 皇子

同院 實季の女

府合 哥あはせし

みりさひみち

あは乃花林院乃うこあはせり
月をよめる 権僧正永縁

いふれに結いあ
おろしきものさるる月

月の哥う張る 藤原朝補

三葉やまのり

神乃らるるすやとあはし

大皇太后宮 府合の月

よめる 大納言 経信

みりさひみち

いふ

いふもあはせし

さか乃川原のこりりあり

秋葉乃家あはせし九月十三日

いふもあはせし

いふもあはせし

月のいふはる 藤原家経朝補

いふもあはせし

いふもあはせし

ゆゑも^{チラス}さすひとさうひなり
月照⁼古橋と^イうゝをよめせ
あゝ 二言

八

とうとういふにねえと
 月をうらなうすふわうれ
 あり上月の夜に
 散原実定が長

大舟有億萬

月かけ乃さすよさるやん
何うなるやとありあへん
題
太宰大貳毛太
さねふまよふひてさるや

太宰大貳長子

いとみけの結乃月

永樂四年殿上冊合子月乃心

蘇東家經明

よもにくさね電りよるえ
およこあき月をみるうな

おふとあき月をみるうな
月、前、揺るがしつゝ、うなをよめる

臨程大吏石季

松のうらりこころがしめをきくとう
あつむる月を嫁^いに^{きこ}るらん
独月をあつめてよめ

独月をあらめてよめ

菅原南教母
 まうじまはあやふねもあらわたり
 月やびり乃ゆきありん
おろし
 初月とつるこをよめ
 携僧の采縁
 とらもうつといふよめる
 月のみとくやまちさうゆ
いづちむして月をもち
 対山初月といふこをよめ
 土師門太夫
たう
 豊年歌子
 あやつけ乃月まひりてわい

やまをのふらゆめりてくる
山家曉月とつるものとよめる
中納言正隆赤松氏
山さくら門田のいねれみくと
何くもきこえ月をそよめ
月乃ちうきくは明るまかり
て月をそくのわたりあかきに
歌乃人へ月はいふとぬねられ
よめる
平忠國卿後醍醐天皇
ありけり月いぬるものうきせ

小萩原 西郷隆盛
天明

うすげらま
皇官乃真野の萩原
も人た乃うこも

ようり白雲の玉野
 のみやいふやうな
 ものやうきうけのよ
 の病をなしてゆん
 とりりいふやうな
 て神のねりも人々
 とのやうなやうな
 ソフヤウコギ
 係上那のやうな
 とやうなやうな
 我らこゝろは
 のきりたつて
 世のやうな
 とやうな
 世のやうな
 世のやうな

野
花
常
露
と
い
ふ
と
よ
や
る
皇
左
宮
肥
後

一、露と人いさよのふれ
 二、花と人いさよのふれ
 三、月と人いさよのふれ
 四、雪と人いさよのふれ
 五、雨と人いさよのふれ
 六、風と人いさよのふれ
 七、雲と人いさよのふれ
 八、星と人いさよのふれ
 九、日と人いさよのふれ
 十、月と人いさよのふれ

太皇太后宮扇合ちしほより人よむよりて
新

小龍原ふみさうりつちうはゆも
いふくうくうくうくうくう
むをいふく 大寧大氣も実
ちうはゆもふみさうりつちうはゆも

金三

おとけの袖く人おとのめう
きりむとて 陸源法師
ふふふーはるのふうきりね
たのみふふふありやあめん
イ 舞合ふふふふふふふ
那陸の家へ舞合ふふふふ
花をよめる 中納言俊忠
ゆふふふふふふふふふふふ
野ふふふ風ふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ

[illegible]

秋乃野々々々鹿乃々々
神祇伯野仲
所行れいふものありやあゝあゝ
をうひわゝさうさうありや
多羽殿乃お裁合ふと云ふなり
心よあり
春冥史公實
何う路乃所望なり秋を
あひあひあひあひあひあひ
思野花といふなり
故原伊実
用活字

けしきあるまじくして
まじきいふおれよめ
おれよめ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ

今ぐしをなぬらん
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ

うけつてくまのふれ
八重とておれよめ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ

おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ
今ぐしをなぬらん
しとつたきとておれ
おれよめとておれ
まじきいふおれよめ
おれよめとておれ

晴よりいづれも
いふせん花の晴より
こころのゆくは
作乃花の
まはるゝ
とくやまふの
は

かかぬ川ちる
戸能の
を
を
情

よのあを
落葉埋^{カハム}橋^{ハシ}といふ
修理大^{カハム}正^{ハシ}親^{ハシ}季^{ハシ}

とくやまふの
ふりけり
落葉^{カハム}埋^{ハシ}橋^{ハシ}といふ
大中^{カハム}長^{ハシ}朝^{ハシ}臣^{ハシ}

かかぬ川ちる
こを
落葉^{カハム}埋^{ハシ}橋^{ハシ}といふ

金三

長

い
風
こ

あ

あ
秋
山
こ
あ
あ

大

い
何
九

中

源

あ
か

いづれかきよめ
とぞわたりし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を

九月乃乃日之井よりわたり
よめり
春宮大史公實
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を

神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月

神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月

神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月
神宮月

金葉和歌集卷第四

冬奇

兼曆二年神宮月より殿上のあ
とを秋を採りて丹つふまつり
に時あをたて源師賢朝臣

神宮月より殿上のあ
とを秋を採りて丹つふまつり
に時あをたて源師賢朝臣
従二位右近親子家乃若き金
時あをよめり後理大史公實
とぞわたりし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を
かきよめし秋を

くらげの山に
 雲のうせ
 くらげの山に
 雲のうせ
 くらげの山に
 雲のうせ

月きふぬる
 歩魚と玉座の如
 りとてふ
 様神すゝとこそ
 よとこいねなちり
 こそう清のいふ方
 うあやゆいあさこ
 何とてとまりと法
 本よりけと不富れ
 ことあるはとんち
 可なり
 あんち清かよとて
 言旨日法人の御様
 おきしは清とわ獨
 のお徳よりわたり

月きふぬる
 歩魚と玉座の如
 りとてふ
 様神すゝとこそ
 よとこいねなちり
 こそう清のいふ方
 うあやゆいあさこ
 何とてとまりと法
 本よりけと不富れ
 ことあるはとんち
 可なり
 あんち清かよとて
 言旨日法人の御様
 おきしは清とわ獨
 のお徳よりわたり

源兼昌
 橋本左衛門
 右近衛大進五郎
 神祇伯石仲

あはすれうとて我
 一良乃様ねとてあは
 國乃乃まねの神光
 といふとていね年
 ねゆとてあねあ
 いち神光ねん
 とらんのを清い
 月やとてあ
 高崎の八幡様
 母とていねとて
 高崎の八幡様
 母とていねとて
 高崎の八幡様
 母とていねとて

あはすれうとて我
 一良乃様ねとてあは
 國乃乃まねの神光
 といふとていね年
 ねゆとてあねあ
 いち神光ねん
 とらんのを清い
 月やとてあ
 高崎の八幡様
 母とていねとて
 高崎の八幡様
 母とていねとて
 高崎の八幡様
 母とていねとて

内大臣

水夢の少と宗正

大納言

ふちろ店〜のすく降し
びさ〜とあすのこ

大中唐公長卿

三才圖會

ことばはらの花と
 よかり情をうきとせ
 世よはにふくみけ
 おもふふ乃すのこもそ
 い蔭乃のこし十ふり
 あふふふとされとあふ
 よふふふふふふふ
 松遺著書のよふ
 山乃推定のとふふ
 なるふふふふふ
 毛とあふふふふ
 著書のとあふふ
 ふふふふふふふ
 ふふふふふふふ

現代の野中

東にけすや何んぞす人

京古里果葛煤

ききりふにまきこぐは使あつた

山は降雪のすくすく時
 うく雪かきゆりけ
 河を田蓼い糸細枝
 葉人うの木の枝と葛
 ちて中と葛城山乃
 枕頭よとくく
 あさこものやとれ乳
 ちとれりハ乳を足
 ちてく我の自髪と
 足羽のささ今よ
 積の糸よたれる白雪
 ちよめりけ
 すみろふいん焼き
 小野の雪はきき
 ちハ炭竈よ立焼

はふすま^{ハフス} 糸太夫
 あさこものやとれ乳
 雪かんちりいりれぬり
 炭竈と焼る 皇宮権大丈師時
 すみろふいん焼き
 雪風れ中と足ゆちりり
 百首并乃中よ雪よめり
 隆源法師
 ちよめり雪ちりぬき
 枝乃ちよ山あてくぬん

山は降雪の中よめ
 ちよめりけ
 ちよめり雪ちりぬき
 枝乃ちよ山あてくぬん
 雪はきき
 ちハ炭竈よ立焼
 ちよめりけ
 すみろふいん焼き
 小野の雪はきき
 ちハ炭竈よ立焼

ちよめりけ
 雪ちりぬき
 枝乃ちよ山あてくぬん
 雪はきき
 ちハ炭竈よ立焼
 ちよめりけ
 すみろふいん焼き
 小野の雪はきき
 ちハ炭竈よ立焼

菅原兼房朝臣

こゝろすす四乃池れそとち
 野々々々々々
 修理大吏殿
 乃ひあはちいさなれそ乃葉乃
 さやあわれそ乃ひとわね
 依^テた^ニ結^ラ暮といふと
 内大臣
 あふとちく年乃くそいおんれと
 花乃ゆかりそをまゆふ那
 年の昔れをよめ
 菅原成道卿

荅成道明

人あれどこれゆゑをわびまう
まゐりなれどこれゆゑをわびまう
いふ月ちひさしう
霜月十日はり「折段」太田家より
冬乃歌もよさうとよふ侍なり
冬乃歌をよみてよふ

清家子
阮西孫

かきつるのころすゝめをみちみおれハ
せめくもあはせとらくれうま
いふはくは年の内よきなりけ
れうま

うふせんきゆの年を

二言

うふせんきゆの年を

物いゆ物れきう

よりてふねい

ふよせく年の暮

やの暮る秋とふ

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

中原長國

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

中納言信

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

金四十

金葉和歌集卷第五

賀年

長治二年 播河院

長治二年二月五日内裏より行不

播河院御製

うふせんきゆの年を

うふせんきゆの年を

都賀門院様合ふ祝乃心を傳ふ

六條大寺

うふせんきゆの年を

野よりすけあ乃と
えぬはれをきりよ
くくと都芳に候
君よりきりよや
中官よりて遷所
萬子内親王は遷所
皇女實政は奉胃
は内親王の所
相模進年 進遠
あ乃がに松のきり
池乃心池の中より
のきり松乃ひきり
て池の中よりきり
とあ乃のきり
このきりきり

あ乃きりをきりよ
橋の院時中官よりて遷所
乃時相模進年といふ
め
大納言後實
あ乃がに松乃きり
りて池乃きり
禁中殿にきり
中納言實
このきりきり
のきりきり

人々ノ一

あ乃きり

あ乃きり

あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり

相模進年といふ

源師俊朝臣

あ乃きり

橘後綱朝臣家

あ乃きり

有原園行

あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり
あ乃きり

源師俊朝臣

式大彌

弄を奏す儀寶^キは
て且^ニて参入す
必司^ニあは立次^ニ小音色
人^ニ再^ニ母^ニり^ニと^ニ参^ニり^ニ
何^ニり^ニに^ニ次^ニ第^ニ十五^ニと^ニあ
は^ニる^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニ山
敷^ニ山^ニ丹^ニ波^ニく^ニち^ニて
あ^ニる^ニ鼓^ニの^ニ振^ニく
く^ニと^ニわ^ニる^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
豊明^ニの^ニ宴^ニ會^ニと^ニい^ニり
彼^ニれ^ニに^ニて^ニ儀^ニ式^ニり
あ^ニつ^ニて^ニわ^ニる^ニあ^ニり
已^ニ日^ニ乃^ニ系^ニ北^ニ破^ニ
已^ニ日^ニと^ニ凡^ニ俗^ニと^ニ悠^ニ紀^ニ

く^ニと^ニわ^ニる^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
何^ニと^ニ日^ニ乃^ニと^ニい^ニい^ニり^ニと^ニい^ニふ
已^ニ日^ニ乃^ニ系^ニ北^ニ破^ニと^ニ推^ニ琴^ニの^ニ里^ニと^ニい^ニふ
松^ニ風^ニ乃^ニ推^ニ琴^ニの^ニさ^ニと^ニい^ニふ
お^ニさ^ニす^ニれ^ニる^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
後^ニ冷^ニ泉^ニ院^ニ乃^ニ時^ニ乃^ニ大^ニ嘗^ニ會^ニ乃^ニ重^ニ基
方^ニ備^ニ中^ニ國^ニ二^ニ万^ニ卿^ニと^ニい^ニふ
蘇^ニ原^ニ家^ニ經^ニ朝^ニ君^ニ
今^ニは^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
お^ニま^ニ乃^ニと^ニ人^ニか^ニは^ニう^ニい^ニり^ニと^ニい^ニふ

重^ニ基^ニ展^ニ日^ニ乃^ニと^ニい^ニふ
哥^ニを^ニう^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
序^ニ破^ニと^ニい^ニり^ニ推^ニ琴^ニの^ニ里^ニハ^ニ丹^ニ波^ニ近^ニ江^ニと^ニい^ニふ
作者^ニ敦^ニ美^ニハ^ニ悠^ニ紀^ニ方^ニと^ニい^ニふ
松^ニ風^ニ乃^ニと^ニい^ニふ
と^ニ本^ニ哥^ニと^ニい^ニふ
今^ニつ^ニき^ニゆ^ニと^ニい^ニふ
史^ニ也^ニ皇^ニ極^ニ天^ニ皇^ニ六^ニ年^ニハ^ニ大^ニ唐^ニ將^ニ軍^ニ蘇^ニ定^ニ方^ニ新^ニ羅^ニの^ニ軍^ニと^ニい^ニふ
う^ニり^ニ百^ニ勝^ニ使^ニを^ニち^ニり^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
そ^ニ時^ニ天^ニ智^ニ天^ニ皇^ニ太^ニ子^ニと^ニい^ニふ
迹^ニ磨^ニ乃^ニ卿^ニを^ニと^ニい^ニふ
と^ニえ^ニる^ニあ^ニつ^ニて^ニあ^ニる^ニあ^ニり
里^ニと^ニ二^ニ万^ニ里^ニと^ニ名^ニ付^ニ
は^ニあ^ニつ^ニて^ニ迹^ニ磨^ニと^ニい^ニふ
か^ニけ^ニり^ニと^ニい^ニふ
同^ニ國^ニい^ニる^ニあ^ニる^ニあ^ニり
よ^ニめ^ニる^ニあ^ニる^ニあ^ニり
高^ニ階^ニ明^ニ頼^ニ

あまのつらみはる稲井ふ
心あきしと

いづこあく風や

常より夏よりいづ
微塵之序并ふ

いづこあく風や
あり

花も今なき年の暮

君より年をわ

こよりねと

いづこあく風や

らんとしてねをよ
りよとあくねと

あまのつらみはる稲井ふ

民やすけあるや今の世代

親乃心を強る 皇居官肥後

いづこあく風や

親もあられぬき今の世代

花も今なき年の暮

大宰大貳長實

花も今なき年の暮

いづこあく風や

振返る大臣中將とて侍る比

忠通公孫は時宗に弟第三子業の

いづこあく風や

春日祭乃使より

公事根深き春日祭

上中目是の二月青

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

春日祭乃使より

因幡因侍女使より

為陸の行事、あまのつらみ

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

いづこあく風や

僅る糸 席男ニハシロメや席田
 乃い愛河よや位麟の
 子年を舞ううむい
 乃る豆代舞ううあ
 うひあるそと男め
 席田伊津貴は美後
 中子代いあうう
 けあみ糸通うう
 天児屋根あ氏祖神
 君り代いんしんしん
 是もあ氏長者の愛
 あれいふ雲山と清
 なる子も君りもせ
 るとせをまつと松
 をううとせ心清も

乃心とよめる 中納言通後
 中子代いあうういおのふとわ
 いふうやめひううれと
 大花口匡房
 君り代いんしんしん 二雲山
 今ねうあさ目乃うんかきり
 新院乃山あうく 藤花久自とい
 ううと清の 丈夫曲情
 なる子も君りもとせまつと
 かげくうくうううううう

五又

中子代いあうう
 拾遺いんあ富山
 乃ねうう我大あ
 氏あふこれめと本
 哥うう親心をあ
 萬河乃あのみ年
 一うひ沈時智人
 のあううのやう
 うや
 中子代いあうう
 彼人れれ神うあ
 中子代いあうう
 天兒れれ神うあ
 中子代いあうう

親の心とよめる 源忠季
 中子代いあうういおのふとわ
 ちとせをまつと松
 實初乃乃家乃哥合し親乃
 号八条太政大臣
 中子代いあうういおのふとわ
 中子代いあうういおのふとわ
 中子代いあうういおのふとわ
 中子代いあうういおのふとわ
 中子代いあうういおのふとわ

二月の雪をう
つゝけ等もよめ
新うへ

雪はゆる年のき
きいさな父方乃親父
水通云申宮乃親父
親父志守心松花
百葉より千を童蒙
抄ニ松花いふ年か
承運と新撰朗詠
尊稱南面松花之
色十廻とけ等雪
を松花より千を童
花とて雪つゝ
松乃より雪花と

宇治お大政大臣水通云

雪はゆる年乃志守心に
ちとせ乃松花とてうへ

あ

六条右大臣親父云
お申宮乃

けとて雪つゝ
松乃花とて千を童蒙

天喜四年西条宮 皇右宮乃哥合

親乃心をよめせり

後冷泉院御製

ありてせりしにわねり

きいさな父方乃親父
水通云申宮乃親父
親父志守心松花
百葉より千を童蒙
抄ニ松花いふ年か
承運と新撰朗詠
尊稱南面松花之
色十廻とけ等雪
を松花より千を童
花とて雪つゝ
松乃より雪花と

雪はゆる年のき
きいさな父方乃親父
水通云申宮乃親父
親父志守心松花
百葉より千を童蒙
抄ニ松花いふ年か
承運と新撰朗詠
尊稱南面松花之
色十廻とけ等雪
を松花より千を童
花とて雪つゝ
松乃より雪花と

心明

前母文の集の比の涼や
敦賀親王女善子など
くさわくともよめる
豊海乃や親父乃
のやふさうあはる
雪もや申宮の傍姫
今よりいふ月神は
はるよりあはる

けとて雪つゝ
松乃花とて千を童蒙

松上雪とよめる 源頼家朝臣

よりいよれとていゆる松乃上

雪とていゆるとていゆる

前母宮いせよかり

いさなり哥合といふるを

せとせりいゆる小親乃心を清る

源後頼朝臣

くさわくともよめるのや 親父乃

君乃けりいんよりい代より

金葉和歌集卷第六

金七

別離哥 様の別

一本別部 二本

別とりの

兼房朝臣 中納言兼隆

子前渡邊守四郎

君うや花の如代

花を忍ふ法融る

況皆通苗代あり

あつと八國司公界

より農と勸め民を

治めおられいふは

よりいさく貴代の

とまり受れとあ

るは我身小

金葉和歌集卷第六

別離哥

兼房朝臣 丹後守あつと下りけ

るははうりたる大納言経長

君うや花乃今やこれ花をて

あふとるあふいさくさるよ

あ

兼房朝臣

よりいさくあふとるあふ小我

おつとる名をもあつとつる

重尹師は成るく下りけ

成りしものなり
言ひ名をうす
りしものなり
ゆゑに振らわ
大宰府迄乃
終はしむ事
そいふなり
ひふふふ
とれなり
風情なり
経補て
糸誦長房乃父也

人々乃たまじけし時
 より
 備河次左
 守りし様乃われとありさし
 ころりしころりし
 歌きしと 諸人きしと
 とれわくわくといふれし
 まじく山をくまやにゆん
 経補はくくく下りし
 上東門院はゆくる人まはる

金方

かゝるまじり袖は独り
袖を独りうつく様
袖をあまうのこ
更とつゝよもせぬ
と誰と袖をあま
てぬゝゝよもせぬ
をよめ。るは

前太宰大貳忠房約

上東門院

われちをなまひつち
かきつち

われちをげまらりおげらん
きく人さう袖いぬ建らん
源公定う大隅ちよるわて下
る時月あつてまゝる別

もつちの様ありて
 尋松遺別平兼國の
 手にお富よりお威ね
 はあひさる古き物なり
 きいさといふ事よ
 られりや
 おまのちのちのちのち
 汗は流し對するところ
 中のおちのちのちのち
 まわりとハ方々幻術
 とつち彼長恨歌よ
 家のは乃ちまのちのち
 まりて楊貴妃の信と
 傳へるは對する
 くの便をいふ

何とて様も 源お威
 もつちの様なりと
 うやまきつた乃ち
 對するちのちのち
 下まのちのちのち
 おまのちのちのち
 小かよつとん
 下まのちのちのち
 下まのちのちのち

金六二

通はさるなり
 いせ乃ちのちのち
 小野吉江に信のち
 を乃ち柄柄玉質
 り古きものなり
 のえとつちのち
 今くさるなり
 らしてのちのち
 果すなり
 ねはるなり
 ね家の人なり
 な命すなり
 いのちのち
 は同じなり
 りいさるなり

何とて時よめる 泰後師
 いせ乃ちのちのち
 こやこ乃ちのち
 ねはるなり
 ねはるなり
 百首哥乃ち
 り
 ねはるなり
 ねはるなり
 ねはるなり

へおまをのちも
 けいふのやう
 わまひとらうと
 恒ね乃梅乃ま
 一國を我は
 にまふまよる
 へ

けいふのやうに
 うう
 わまひとらうと
 恒ね乃梅乃ま
 一國を我は

播磨光朝臣

